平成成年の対話録

屈折した自我の持ち主Ｋ

「俺はこの組織に生かしてもらっている、ここの外ではやっていけない。

どうせダメな人間なのさ。ここでも、バカにされている。そして憎しみ悲しみに浸っている。

俺は今まで親にも一度も褒められたことがない。誰からも好かれない。

ここの一員になるということが、俺という人間にとって、唯一残された道。

最底辺に落ちぶれないための唯一の道なんだ。

お前は、自分が特別だなんて思っているのだろう？

いいか。オリジナルなんて存在しない、お前のような奴なんてどこにでもいる。

お前の考えの全てが浅はかだ。

何の苦労も無しに、ここに来たお前を見ているとイライラする。

頑張ってここに来た俺の気持ちを考えたことがあるか？

お前みたいな浅はかな奴に舐められるのは我慢ならない。

お前の存在そのものが俺をバカにしている。このまま俺をバカにするならお前の大切なものを奪う。俺には失うものはないからな。・・・・を殺す。」

～～～～～～～～～

過ぎ去った日々、Ｋはそういった。

お前の孤独な苦しみ、俺は分かっている。とまでは言いたくないが、この世知辛い世の中ではある程度共感できる部類の人間だと思っている。(思っていた。)

今となっては、俺も、ダメだなぁ、こんあ自分なんてって思ってしまう。組織の一員でなければ、生きていけない。なんて思ってしまう時もある。

それもお前の呪文が一因だった。けどな、もうその呪文は解けた。

社会に出る前に抱いていた劣等感が何かにしがみつくことで、都合良く消えることなんてない。それはお前も知っているだろう？

ＳＮＳに楽しげな投稿をして何か良くなったか？いつの日か、そのタイムラインが劣等感を消してくれるといいな。

俺にはそんな淡い期待は持てないみたいだ。

ここにいてもいいいし、いなくてもいい。お前の嫌いな考え方だったな。

まあ、組織の指示に従えないから、いずれ抜けることになる。

なにより、このまま適当に続けていたら、お前が誰かを殺しそうだからな(笑。冗談だと思いたい)

俺の後ろに、何か“逃げ”っぽいものができてしまう気がするが、そんなものは珍しくもない、この人生。

そいつが、心を捉えて放さなかったら、前を見て歩くか、元気があれば走ればいい。

綺麗な景色が見えてきた頃、ふと後ろを振り返ってみると、それは遠く、遠くの懐かしい思い出の一つにすぎないさ。

お前はそれを“劣等感”だというのかもしれないが。